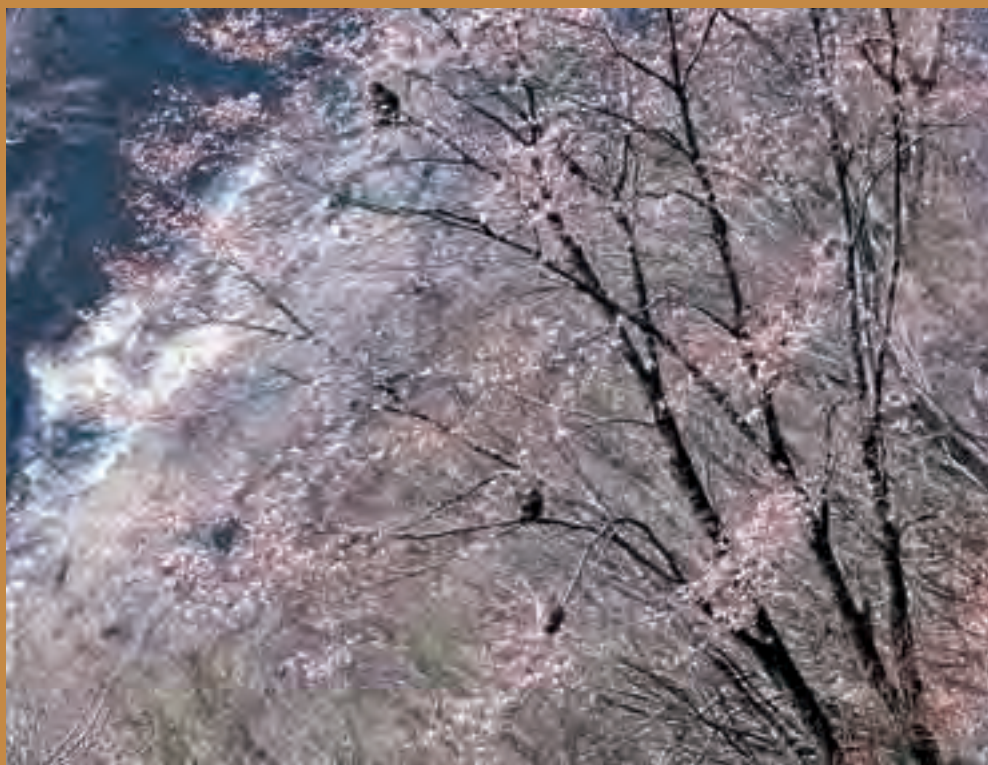


白山の自然誌 31

# 新編 ニホンザルの四季



2011年3月

石川県白山自然保護センター

## は じ め に

ニホンザルはツキノワグマやニホンカモシカとともに白山を代表する動物です。同じ霊長類として私たちにもっとも身近な存在で、かれらの行動や生態から私たちは多くのことを学んできました。県内では、手取川の源流域にしか生息していなかったニホンザルは昭和30年代から40年代にかけては観察が難しく、自然愛好家のあこがれの動物でした。

白山麓では、昭和41年に白山市中宮のジライ谷でニホンザルの給餌場をつくり、自然教育と観光のため約30年間にわたって給餌活動を続けていましたが、昭和60年代以降、ニホンザルを取り巻く状況は大きく変わりました。分布地域が拡大して作物被害が発生するようになったため、平成7年からジライ谷の給餌は中止することになりました。このようなことから昭和63年に発行した「白山の自然誌8 ニホンザルの四季」は現在のニホンザルの状況とかなり異なっているため、書き改めることにしました。

昭和60年代以前の白山地域のニホンザルのほとんどは冬季には尾添川や手取川沿いの谷筋ですごし、夏は奥山に移動していましたが、昭和60年代以降、1年を通して村里に依存する群れが増え、住民から作物被害に関する苦情が多くなりました。このような状況のなかで、県と地元白山市ではニホンザルの保護管理計画を作成し、被害対策を行っています。

現在、ニホンザルは村里では被害をもたらす困った動物ですが、依然国民的に人気のある動物です。この小冊子が白山麓のニホンザルの実態と生態について理解を深めるものになれば幸いです。

(表紙 写真説明)

蛇谷のヤマザクラの花を食べる。小さい花卉を一つ一つつまみながら静かな春のひと時が過ぎる。

(裏表紙 写真説明)

初冬、身体を寄せ合って暖をとる親子

# も く じ



## 若草・若葉のころ

新しい命の誕生 .....	2
豊かな食べ物 .....	4



## 新緑のジライ谷

カムリA群の40年 .....	6
子供の成長 .....	8



## 紅葉のころ

オスの生活 .....	9
木の実で冬に備える .....	10
季節移動 .....	12



## 雪山に生きる

食べ物不足に耐える .....	14
群れの分布 .....	16
寿命 .....	18

野猿広場の給餌の中止 .....	19
------------------	----

サルと人の共生の道 .....	20
-----------------	----

## 新しい命の誕生

白山の春は突然やってきます。4月下旬に暖かい風が吹くと、草木が一斉に芽を吹き、長い冬を耐えぬいてきたサルにとって、豊かな季節の訪れです。急斜面で雪崩が落ちやすく雪が積っていない南向き斜面の芽吹きが最も早く、ハクサンアザミ、イタドリ、ヨモギなどはサルの大好物です。

母親は、この豊かな季節に子育てをします。白山では、まだ雪の残っている3月に出産が始まり、6月まで続きます。なかでも4月下旬から5月上旬にかけて、多くのアカンボウが生まれます。この季節に出産することには、もうひとつの意味があります。サルにとって最も厳しい季節である冬までに少しでも成長し、体力をつけておくため、秋の木の実の豊かな季節ではなく、春に生まれるようになっているわけです。早春にアカンボウが生まれる傾向は、雪国のサルに特有のもので、南日本のものは、普通4月から7月ごろにかけて生まれます。妊娠期間約180日として、10月から11月にかけて、早春の出産に合わせるように交尾期を迎えているのは、驚くべき適応力といえます。

実は、雪国のほとんどの動物は、サルと同じ理由で、春一番に子育てをしています。ツキノワグマは、冬眠中に小さな子を産み、春には育ち盛りの大きさになっています。ニホンカモシカは、5月から6月にすぐに歩けるくらいの子が生まれ、まもなく自力でどんどん食べて成長します。



4月には残雪の中で次々にアカンボウが生まれる



母ザルはアカンボウを大切にし、しばらくは手元から放さない

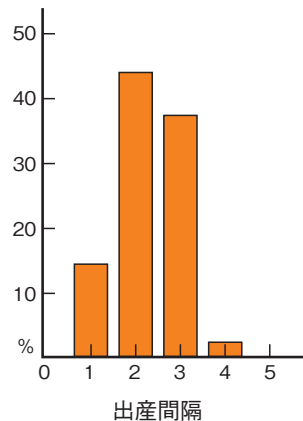
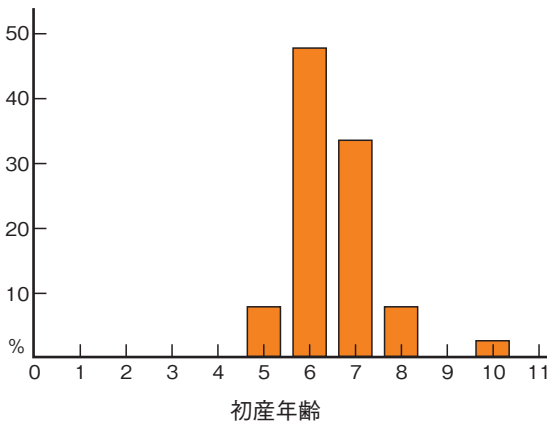
ニホンザルは、ふつう1回に1頭の子を産みます。まれには双子が生まれることもあります。母親の体力を考えても、群れの移動に付いていくためにも、やはり1頭を育てるのが精一杯なのでしょう。オトナメスは、毎年出産するわけではありません。前年に子を持っているときは、続けて妊娠することは少なく、多くのメスは1年おきに子育て



2か月ぐらいになると母ザルの背中に乗れるようになる

をしています。カムリ A 群の記録を見ると、なかには続けて産んだり、3年目に産むものもいて、平均では2.2年に1回でした。そのために群れ全体では、1年おきにいわゆるベビーブームがみられる傾向があります。

出産はおもに夜または早朝の群れの移動しないときのようなようです。出産直後はまだ身体がぬれていて、へその緒のついている状態です。アカンボウは、生まれてすぐに手足で母親の腹の毛をつかみ、ぶらさがる力を持っています。これも、集団から離れては危険が多く、群れをなし、移動しながら暮らすサルに与えられた能力です。



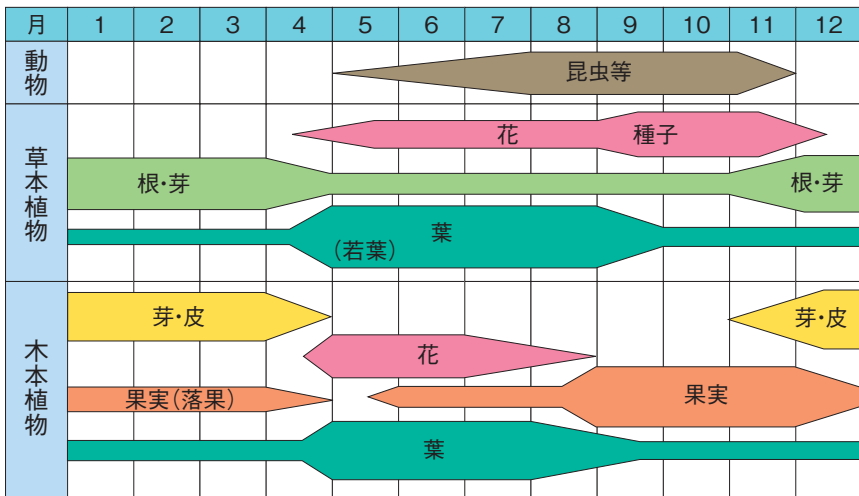
# 春

## 豊かな食べもの

ニホンザルは、草木の芽、果実、種子、そして昆虫類など幅広いメニューを持っている動物です。しかし、実際に食べているものは、ほとんどが植物性のものであり、生態的にいうと植物食といってもよいくらいです。多くの食べ物があるとはいっても、白山のように四季がはっきりしているところでは、季節によっておのずから食べられる物は限られ、主食も季節によって大きく変化します。

春には、若草・若葉がふんだんにあり、なかでもハクサンアザミやカエデ類の葉を好みます。ヤマザクラ、ブナなどの花も見逃しません。白山では、低山から標高1,500m くらいまで2か月以上にわたって、雪どけのあとに次つぎと若草が芽を吹きます。それらを求めて歩くので、サルは長い期間、早春を楽しんでいるともいえます。

夏には、全山緑におおわれるので、特に毒があるとか、アクが強すぎるものを除いて、あらゆる草木の葉や芽、花、果実、種子などを食べています。また、カブトムシやセミなどの昆虫、サワガニや湿地にいる水生昆虫、さらにはカタツムリまで、機会があればいろいろな動物性の食物も採ります。



白山のニホンザルの主な食べ物





日当たりの良い斜面の若草を待っている



日当たりの良い斜面はカモシカにとっても絶好なえさ場



雪解けの直後、ススキの株から柔らかい若芽を食べる



芽吹きが早くサルの大好物のハクサンアザミ



昆虫やカタツムリなどの動物性のもも食べる



春から夏はハギなどさまざまな植物の葉が主食になる



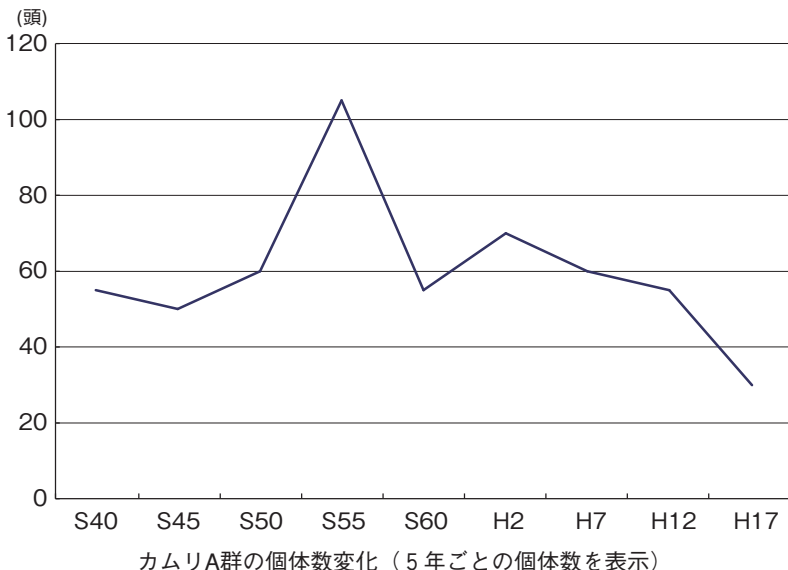
## 新緑のジライ谷

### カムリ A 群の40年

昭和37年に、<sup>カムリヤマ</sup> 冬瓜山を遊動域にしていた群れが、ジライ谷で餌付けされ、昭和41年から平成6年までの28年間公開されてきました。

カムリ群は 最初、約80頭だったものが、ジライ谷の餌付け場へ誘導されたのは約50頭で、これをカムリ A 群と呼んで観察が続けられてきました。残りの約30頭（カムリ B 群）は人との接触をさけて一時はジライ谷の上流で行動していましたが、その後行方が分からなくなりました。

カムリ A 群は餌付け後、約10年後に個体数が増えはじめ、昭和55年ころには100頭をこえる大群になりました。その後、3回の分裂を繰り返し（昭和56年に23頭のカムリ C 群が、昭和58年には12頭の D 群が、昭和62年には7頭の E 群が分裂しました）、餌付けを中止した平成7年には餌付開始当時とほぼ同じ個体数になっていました。その5年後の平成12年には約50頭になり、餌付け中止から10年後の平成17年には約30頭に減少し、餌付けしていた時期に比べると個体数は減少している傾向がうかがえます。



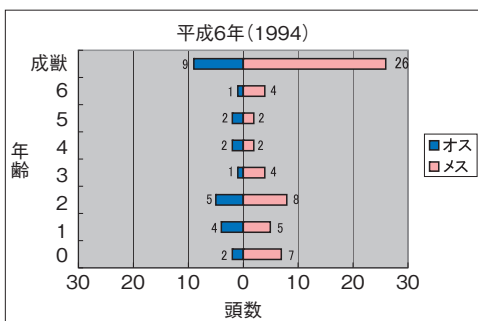
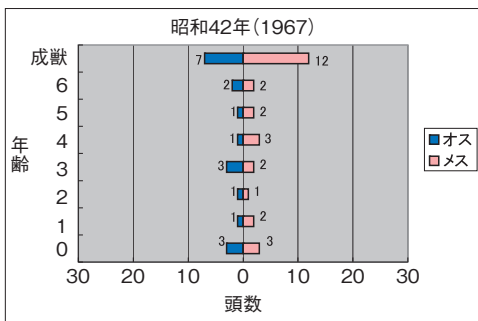


カムリ A 群の給餌中止前後 10年間のアカンボウの数を比較すると中止前は平均12.1頭（昭和60年～平成6年）、中止後は平均6.7頭（平成9年～平成20年：2年間不明）になっており、給餌中止後のアカンボウの数は5.4頭も少なくなっています。このことから給餌がメスの出産数に影響し、群れの個体数増加に影響を与えていたと思われる。

給餌前後のアカンボウの数

年	アカンボウ数
昭60 (1985)	11
昭61 (1986)	6
昭62 (1987)	16
昭63 (1988)	10
平1 (1989)	9
平2 (1990)	10
平3 (1991)	19
平4 (1992)	9
平5 (1993)	9
平6 (1994)	22
(平均)	12.1
平9 (1997)	3
平10 (1998)	8
平11 (1999)	— (不明)
平12 (2000)	2
平13 (2001)	— (不明)
平14 (2002)	12
平15 (2003)	6
平16 (2004)	6
平17 (2005)	3
平18 (2006)	8
平19 (2007)	10
平20 (2008)	9
(平均)	6.7

\* 滝澤・伊沢ほかの調査による



カムリ A 群の給餌初期と中止直前の年齢構成



「トン」と呼ばれたカムリ A 群のオス（昭和63年）



## 子供の成長

アカンボウは生まれてすぐに手足の力で母親の腹にぶらさがることができますが、まだ四つ足で立つことはできません。生後約1か月でよちよち歩きができるようになって、なかなか母親のもとを離れようとはしません。2か月くらいまでは、母親がひとときも目を離すことなく、守ってやります。

歩きまわれるようになると、他のアカンボウ達と遊ぶようになります。夏には姉や兄とともに子供集団を作って、レスリングやオニゴッコをしているのがよく見られます。そんな時に、近くに群れのオトナオスが見守っていることがあります。姉さんはよく弟や妹の面倒をみて遊んでやりますが、オトナメスは自分の子以外のアカンボウの世話をすることはまずありません。

親子が少し離れているときに、何か危険やけんかが起こったりすると、どちらかの叫び声で、すぐに母親の胸の中へとびこみます。母子が休んでいるとき、他のサルも何頭か集まって、毛づくろい（グルーミング）をしているところがよく見られます。それらは母親とその子供たちを中心とした母系家族といってもよい集団です。

生れてから4か月もすると、母のまねをして軟らかい草などを食べてみるようになります。母の乳房に吸いつくのは、約半年から1年ほども続きますが、秋になると母乳よりも自分で探して食べる物のほうが重要になります。



生まれて数カ月、親から離れて子どもだけの遊びなかができる



子どもは水に飛び込んで遊ぶがオトナはめったに遊ばない



### オスの生活

ニホンザルの社会では、オスとメスでは一生の過ごし方が大きく違います。メスは群れから離れることはあまりなく、生まれた群れで一生を送ります。しかし、オスは、思春期である3才から5才になると、ほとんどのものが群れを離れていきます。一度群れを離れたオスは、1頭だけでハナレザルになって歩き回るものや、2～10頭くらいのオスグループを作るものもあります。人に慣れたオスは、群れを離れてからもあまり人を恐れないので、他の群れに付いていても、ときどき人に近づいてくる場合があります。よく観察され個体識別されたオスが何年かしてから、はるか遠くの群れに付いているのを発見される場合もあります。

一度群れを去ったオスは、成長してからも、生まれた群れへもどることは少なく、他の群れに付くことが多く観察されています。また、一つの群れに入って落ちつくものや、群れから群れへと渡り歩くものもいます。メスは残り、オスが別の群れへ移っていくことは、結果的に近親交配を避ける重要な意味を持っています。



カムリ群生まれで他の群れに付いたオス



発情・交尾は中秋から雪が降るころまで続く

ハナレザルは、しばしば遠くまで移動することがあります。加賀市や金沢市で一匹のサルが出たという話題となるのは、そのようなオスです。能登半島の先端までハナレザルが見られることもあります。白山山系の群れからとびだしたオスと仮定すると一番近いところからでも、100km以上も移動したことになります。

# 秋

## 木の実で冬に備える

秋は、春と並んでサルにとっては食べ物の豊かな季節です。ミズキ、ヤマブドウ、サルナシなどの果実が熟し、オニグルミ、ツノハシバミなど脂肪の多い実が成ります。なかでもサルの大好物であり、栄養価も高いのは、ブナの実です。ブナの実が成ると、サルはブナ林に定着する傾向があります。しかし、ブナは毎年実をつけるわけではなく、



クルミの殻を割って食べる。クルミは脂肪分が豊かで栄養が高い

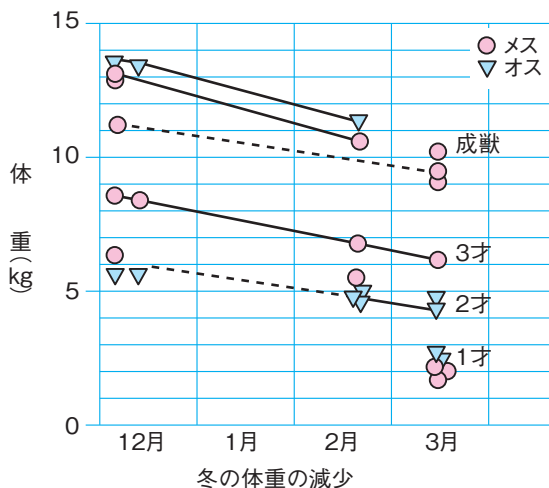
5年から10年に一度大豊作がある反面、まったく実の無い年が続くこともあります。

多雪地のサルにとっては、秋に食べられるカロリーの高いクルミやドングリは、やがてやってくる厳しい冬を乗りきれよう、皮下脂肪を蓄え、体力をつけておくため、たいへん重要なものなのです。そのため、山のいろいろな木の

実が不作の秋には、サルたちが無事冬を越せるのかと心配になります。ブナやナラのドングリなどの堅い実は、冬には雪の割れ目から拾い、春には雪の消えたところで若葉の出るまで食べることができません。



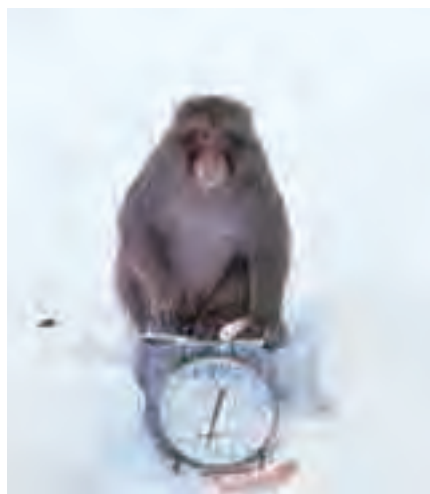
ブナの実は美味しくて栄養価が高い



秋の実りの季節には、たっぷり食べてサルたちはまるまると太ります。一年で最も体重が重くなるのが、秋の終わり頃です。蓄えは冬になると少しずつ使われ、体重も減っていきます。何頭かのサルの体重を計ってみると、オトナメスは冬の始めに12kgから13kgだったものが、冬の終わり頃には、10kgから11kgにまで減っていました。豪雪で春到来の遅い年に、栄養失調で死んだものは、8kgくらいになっていました。

オスや子供は、一頭一頭の体重に違いが大きいのにに対し、オトナメスは、比較的体重はそろっています。同じニホンザルでも、白山のものは、秋の太った時に12kgから13kgもありましたが、暖かい地方では、10kg以下のものが多くみられます。

白山のサルは、長野県や青森県のものと同様に体つきが似ていて、どちらかというと大がらなサルだといえます。寒さが厳しく、食べ物の少ない環境に耐えるためには身体が大きいほうが有利だと考えられます。



このオスは12月には14kgあったが、3月には11kgになった



## 季節移動

白山のサルの研究が始まった昭和45年ころ、蛇谷や尾添川沿いに生息していた群れは、冬は標高400m～700mの低標高地で生活し、夏にはブナ林のある標高1,000m～1,600m地帯で生活してることがわかっていました。昭和60年ころには一里野温泉から中ノ川沿いに標高1,800mのゴマ平まで約10kmも移動する群れ（タイコ群）が知られていました。

その後の発信機を付けた群れの調査から、冬は鳥越地区の河原山から左ヒダリツブテ 礫ジゴクノソキ 周辺で過ごし、夏は中宮道の地獄視までの約23kmを移動している群れ（タイコA4-2群）がいることがわかりました。また、夏の間、瀬波川上流の高標高地に行き、その他の時期は市原や木滑などの低標高地で生活している群れ（タイコA1群）がいることもわかってきました。この群れの移動距離は約10kmになります。これらの長距離移動している群れはいずれもタイコ群に由来する群れです。



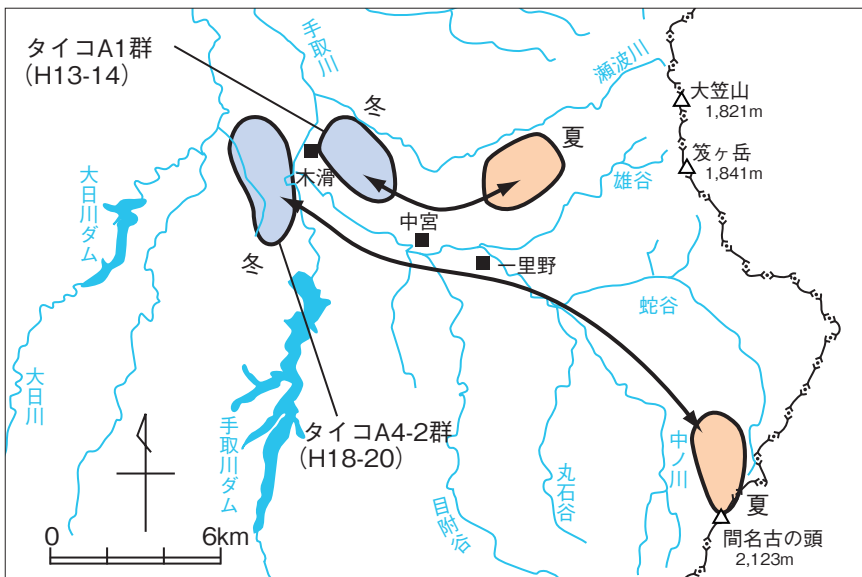
タイコA4群の雄（白山市河原山）

—昭和63年12月に初めて河原山で群れが観察された。



もともと、白山地域は豪雪地で厳冬期の生活は厳しく、多くの群れは夏と冬の生活場所を変えながら暮らしていたようです。秋の木の実は高標高地から熟しはじめ、少しずつ低地へ降りてきます。それを追うようにして9月から10月にかけてサルも低標高地へ移動します。それから春までは、谷沿いの急斜面を中心に生活します。白山麓の標高300~500mあたりでは、11月下旬には積雪が見られるようになりますので季節にあわせるように低標高地に移動しているというわけです。

多くの群れの遊動域を一年をとおして重ねあわせると、冬の谷沿いの集中域から、夏に利用される周辺の山へと遊動域が放射状に広げた花びらのようになっており、一群の遊動域は谷筋から尾根筋までの細長い範囲になります。



タイコ群の季節移動の例



## 雪山に生きる

### 食べ物不足に耐える

北陸地方の山地に生息するニホンザルは、世界で最も雪の深いところに住むサルだといえます。長く厳しい冬の寒さと飢えに立ち向かっています。寒さに対しては、厚い皮下脂肪と長い毛が体温を保護してくれています。サルにとっては、寒さもさることながら、やはり、食物不足をどうして乗りきればよいか最大の問題です。

冬は雪の上に出ている木の枝から樹皮や芽を採って食べます。カエデ・サクラ類などさまざまな木の冬芽をつまんで食べています。フジやケヤキの皮はむきやすいのでよく食べている植物です。しかし、樹皮と芽だけでは量も



雪の上を歩くときは他のサルの後が歩きやすい



手足とも親指が離れるのは白山ではサルだけ



中宮温泉の源泉は最高の休み場になっている



雪の割れ目で食べるササは冬でも栄養価が高い

栄養も十分だとは思えません。それを補うように、川のふちや雪崩の跡などの地表が現れているところへやってきます。そこには、クズなどの根、ヨシやススキの根や芽があり、スゲ類やササ類の緑の葉もあります。

少し暖かくなると冬でも高い栄養価のある緑の葉が雪の割れ目から顔を出します。また、林の下に雪の割れ目があれば、秋に落ちていたドングリなどの木の実を拾うこともできます。冬にはサルが、地形の急なところを選んで生活するのは、天敵から逃れることと同時に、雪崩がよく発生して地面が露出するため、食物も確保しやすくなり意味のあることなのです。



ヨシの根を洗って食べる



フジの皮はむきやすい



雪の積もらない沢でクルミを拾って食べる



木の枝の地衣類も食べる

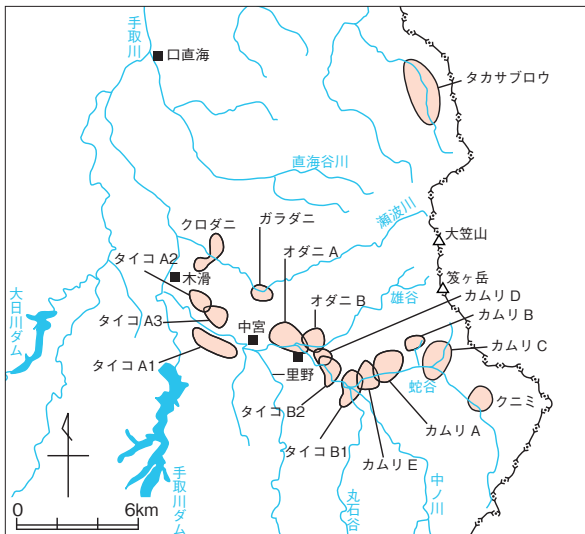


## 群れの分布

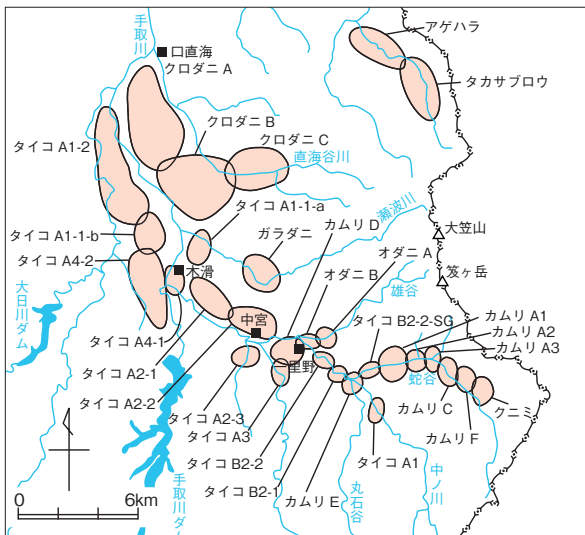
もともとニホンサルは、能登半島にも生息していました。いまの輪島市門前町に明治時代まで群れがいたことが知られています。白山山系をみると、昔は浅野川・犀川の上流域、手取川流域、梯川上流域などの広い範囲に生息していたという情報があります。

サルの群れが山奥にしか見られなくなったのは、約100年前のことでした。その頃には、手取川上流域の険しい地形のところにだけ残っていました。

昭和30年代に、焼畑や炭焼きが無くなり、サルは再び分布を広げてきました。白山地域の群れは昭和45年には、約11群300頭と推定されていましたが、今では



昭和63年(1988)の冬の群れの分布



平成22年(2010)の冬の群れの分布

(カタカナは群れの名称を示す)

白山山系のニホンザルの群数と個体数（昭和63年および平成22年）

昭和63年(1988)

群名	頭数
カムリ A	40
B	20
C	22以上
D	15~20
E	7以上
タイコ A1	60~70
A2	20以上
A3	20以上
B1	30~40
B2	30~40
クニミ	40~50
オダニ A	50~60
B	30~40
クロダニ	30~40
ガラダニ	20以上
タカサブロウ	30~50
合計	
16群	450~600

平成22年(2010)

群名	頭数
カムリ A1	40
A2	30
A3	20
C	30
D	40
D-SG	40
E	30以上
F	20以上
小計	250以上
タイコ A1-1a	40
A1-1b	40~50
A1-2	40
A2-1	70~80
A2-2	40~50
A2-3	40
A4-1	30~40
A4-2	30
A3	60
B1	30
B2-1	30~40
B2-2	60
B2-2-SG	20~30
小計	490~550
クロダニ A	40
B	40~50
C	30
小計	110~120
オダニ A	50
B	20~30
小計	70~80
クニミ	40
タカサブロウ	50
アゲハラ	50
小計	100
ガラダニ	50
合計	
30群	1,100~1,200

（平成22年）約30群1,100頭~1,200頭にまで増えています。

近年は人がサルを追い払うことは少なく、また、暖冬のため死亡する個体も減り、次第に個体数や群れの数が増え、遊動範囲は下流方向へ広がりがつづいています。しかし、ニホンザルは、まだまだ県内の限られた地域に分布する動物です。夏の間は、森の中に生活しているので、彼らの動きはなかなかつかめません。山が白一色になる冬には、観察しやすくなり、群れの大きさや遊動域が見えるようになります。この冬の時期の調査によって、群れの分布や数の変化が明らかにされてきました。



## 寿命

サルの寿命は何年かというのは、多くの人が興味を持っています。しかし、野生動物では寿命はよく分かっていません。

白山のカムリ A 群の観察例では、18才くらいから、見るからに老いたという感じになり、メスでは子を産まなくなります。そして、20才くらいまでにほとんどが姿を消し、人目につかないところで静かに土に返っているものと思われます。白山の個体識別していたサルで最も寿命の長かったのは、昭和62年頃に約25才と



推定25歳の高齢のメス

推定されていたカムリ A 群の「キク」と名づけたメスでした。白山のサルは、南日本のサルに比べて、やや寿命が短いようです。大分県高崎山では、28才まで子を産み、32才で元気にしているメスがいました（昭和60年ころ）。白山の冬は厳しく、けがや病気で身体のどこかがおかしくなれば、春まで生き延びられないものと思われます。



大雪の冬のアカンボウは半分以上生き残れない

山で死体が見つかることはほとんどありませんが、豪雪の年の大量に死亡したようすからすると、真冬の寒さで死ぬものは少なく、3月から4月になって、栄養の蓄えもなくなり死亡していくものが多いようです。近年は積雪期間が短くなり、春先に死亡する個体が減少し、生存率が高くなっていると思われます。



## 野猿広場の給餌の中止—33年間の給餌にピリオド

昭和41年以來ジライ谷で続けられた給餌は平成7年に中止することになりました。昭和37年から冬瓜山<sup>カムリヤマ</sup>を遊動域にしていた群れに餌を与えていましたので、この期間を含めれば33年間の給餌期間になります。



ジライ谷野猿広場（平成元年）

カムリA群はよく人に慣れ、ジライ谷の野猿広場は、観光や自然教育の対象として人気を集

めてきました。この頃は全国各地で野猿公園（約30ヵ所）が開設されていました。

ところが昭和57～58年ごろから下流域で農作物被害が出て、平成3年に白山麓では初めて5頭駆除されました。このことが契機になり、旧吉野谷村と中宮温泉組合と石川県の3者で話し合いをして、給餌活動に終止符をうつことになりました。

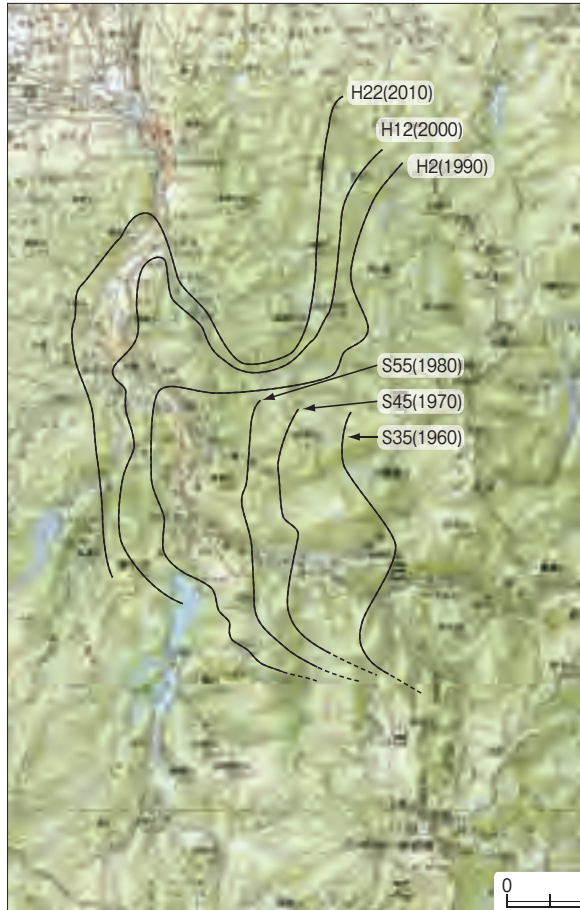
その後、平成12年まで、管理員を配置して給餌の中止による行動の変化などを観察してきましたが、人に慣れた状態が続いている以外は特に変わった行動は見られず今日に至っています。

### 白山ジライ谷野猿広場の経緯

年	経過 概要	備考
昭37年(1962)	糸田敬仁氏カムリ山周辺で餌付け開始	・白山国立公園指定
昭39年(1964)	吉野谷村が餌付けを実施	・白山学術調査団調査開始
昭41年(1966)	一般公開(吉野谷村)	・カムリ群78頭のうち、46頭を誘導
昭42年(1967)	「野猿公苑」として運営開始(吉野谷村)	
昭45年(1970)		・推定頭数11群300～350頭
昭47年(1972)	「ジライ谷休憩舎」建設(石川県)	
昭48年(1973)	石川県と吉野谷村で共同運営	・石川県白山自然保護センターの開設
昭52年(1977)	白山スーパー林道供用開始	
昭61年(1986)		・吉野谷村の有害駆除の申請と許可
平3年(1991)		・有害駆除5頭(白山地域で初めての実施)
平4年(1992)	県、吉野谷村、中宮温泉旅館組合の3者で人工給餌について協議	・推定頭数約20群1,000頭
平6年(1994)	協議(2回、11月)	
平7年(1995)	協議(2回、4～5月)、人工給餌の中止を決定(三者の覚え書き)	・平成7年から12年まで管理員配置(吉野谷村)ーサルの追い上げ、追い払いと自然ガイドを実施。
平12年(2000)	管理員(吉野谷村)配置の中止	

## サルと人の共生の道

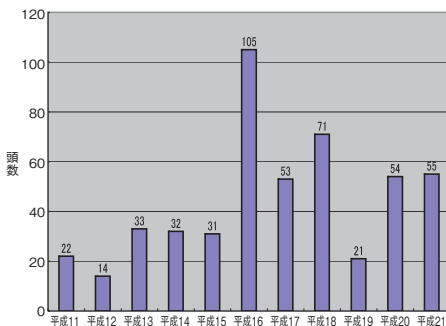
白山で生息するニホンザルは昭和60年代以降徐々に下流域に分布を広げ、村里に出没し、農作物を加害する群れとなっています。また、昭和45年には約11群だった群れが平成22年には約30群に増加しています。捕獲数も平成11年～15年では年間20～30頭程度でしたが、平成17年～21年では年間約50頭に増えています。被害を与えている群れはタイコ群がもっとも多く（タイコ A1-1a、A1-1b、A1-2、A2-1、A2-2、A2-3、A4-1、A4-2の8群）、ついでクロダニ群（クロダニ A、B、Cの3群）、カムリ群（カムリ D 及び D のサブグループの2群）、そのほかオダニ A 群、アゲハラ群があげられます（16～17頁参照）。



ニホンザルの分布の拡大（昭和35年～平成22年）  
国土地理院地勢図「金沢」を使用

サルの被害対策としては、県と白山市と共同で群れの遊動域を明らかにすると同時に、作物を守るように住民自らが群れの位置を察知し、被害を防除できる努力を続けています。

私たちとサルなど野生動物とが共生していくには、村里に侵入する野生動物を追い払ったり、駆除するなど、日常的な対応行動が大切だと思います。少しでも気を緩めれば野生動物は田畑に入り込んで作物を食い荒らします。人と野生動物とは庭先や街中では「共生」できないことを理解しなければなりません。しかし、近年は野生動物といい関係を保ち、共生してきた村里が減ってしまいました。全国的に多発する獣害問題は、日本の壊滅的な農山村がかかえた社会問題ですが、今後はもっと野生動物と向き合うことができる村里づくりが必要ではないかと思われれます。



ニホンザルの捕獲数



サルの侵入を防ぐために張られた柵  
(昭和40年代には思いもつかなかった風景)

本文は伊沢紘生さんや滝澤均さんなど多くの方々の資料や写真を利用させていただきました。改めて皆さんにお礼申し上げます。

写真：水野昭憲 滝澤 均 志鷹敬三 上馬康生 丹保秀一 野崎英吉

白山の自然誌 31

新編 ニホンザルの四季

発行日 平成23年 3月20日  
 文・構成 林 哲 水野昭憲  
 発行 石川県白山自然保護センター  
 〒920-2326 石川県白山市木滑ヌ4  
 Tel. 076-255-5321 Fax. 076-255-5323  
<http://www.pref.ishikawa.lg.jp/hakusan/index.html>  
 E-mail : [hakusan@pref.ishikawa.lg.jp](mailto:hakusan@pref.ishikawa.lg.jp)  
 株式会社 橋本確文堂

印刷

